

## 復職を果たした右片麻痺・失語症例の経過について

医療法人社団永生会 永生クリニック

○ 言語聴覚士 <sup>オグチカズコ</sup> 小口和津子 江村俊平 吉井孝樹 松井佳奈美 山本徹 多良淳二

### 【はじめに】

失語症者の復職率は全国的に1割といわれ、復職後に職務を継続することも困難である場合が多い。今回、短期間ながらも復職を果たし、退職を迎えた後も、活動範囲・参加機会に向上のみられた右片麻痺・失語症症例を担当する機会を得た。復職から現在に至るまでの経過を報告する。

### 【症例紹介】

59歳男性、元会社員（55歳で本社を退職後、系列会社に転籍し勤務）左被殻出血、右片麻痺、中等度失語症、注意障害

### 【現病歴】

平成X年2月に上記発症しA病院入院。B回復期病院・A病院外来リハを経て、発症1年5カ月時に当院の外来リハ開始となった。身体機能は右片麻痺（Br.stage 上肢Ⅲ 手指Ⅲ 下肢Ⅳ）、表在感覚・深部感覚重度鈍麻。ADLは入浴以外自立。中等度流暢性失語を認め、自発話はジャルゴンや錯語が含まれ複雑な内容の伝達に介助を要した。書字は、漢字・仮名ともに想起困難で、PC入力は独力では不確実。理解面は複雑な文・情報量の多い文で低下を認めた。知的機能はRCPM28/36で年齢平均に比し低下を認めた。注意機能にも低下を認めた。

### 【経過】

発症1年5カ月の外来開始時点では本人・妻ともに機能改善への希望が強く、妻より「仕事を通して障害の改善を図りたい」という希望がきかれた。本人も復職を希望していた。リハ職の視点からは機能障害の重さから復職後の困難が予想された。しかし、一度復職して現実場面を経験した方が将来的に生活に適応できると話し合い復職届を提出する運びとなった。その際、妻による意見書とSTよりリハ情報提供書を提出した。企業側は、退職を仄めかしたりジョブコーチ受入れを断るなど本人の復職に好意的でない面がみられた。しかし妻の働きかけにより、妻が1ヶ月間同席して介助することを条件に、発症後2年5カ月時に復職した。復職後の業務はPCの使用が主で、社内通達の確認や顧客情報を地図上にプロットするという作業であった。しかし、作業が単調でやり甲斐を感じない、新しい仕事がない、障害に理解が得られず同僚から能力以上の事を要求される、厭味を言われる等、本人・妻ともにストレスが多い様子であった。復職から約1年後、支社の統合により自宅からの通勤困難になった事や会社の体制が変化したこともあり、本人自ら退職を選択した。退職により活動量の減少や社会交流機会の減少が危惧されたが、絵を描くなどの新たな趣味活動を開始する、旅行に年10回以上出かける、会社の同僚と食事をする、などむしろ退職前に比し活動範囲・社会交流機会に拡大がみられた。職場でのストレスもなくなり、本人のQOL向上が伺えた。外来リハ時には「描いた絵を会社の同僚に贈りたい」・「個展の開催を目指したい」、「電車・バスを利用して外出したい」、「車の運転をしたい」等、活動・参加面での目標が表出されるようになった。

復職について、本人は「自信がついた、復職して良かった」とし、妻は「復職したことで病前の人間関係を維持でき、現在も社会の一員で居続けられる」と振り返っている。

### 【考察】

本症例の復職期間は1年余りで、長期間の職務継続には至らなかった。しかし、復職により自己効力感が高まったこと、退職後は目標が活動・参加面へとシフトし、趣味活動や外出範囲の拡大へとつながったこと、病前の人間関係が維持されたことなどから、本症例にとって復職を経験したことは、その後の地域生活を過ごすうえで一定の意義があったと考えられる。